

## 長安城遺跡の新発見と現況

### 市来 弘志

ただいま御紹介に預かりました市来と申します。本日はこのようなお話をさせていただく機会をいただきまして誠にありがとうございます。

司会の植田先生から御紹介いただきましたように、私は学習院大学を卒業いたしましたので、二〇一二年から西安にあります陝西師範大学で日本語教師をしておりました。こちらは留学もしたところですのでずっと西安におりましたけれども、コロナ禍等々ございまして今年の九月から上海の同済大学に移籍することになりました。

こういう職業ですと本来は中国におりますが、昨年の一月に一時帰国した後、コロナ禍のため渡航することができず、現在は日本にいる状態になっております。前回の小林

先生、野口先生のお二人は現在も中国現地にいらっしゃいますけれども、私の場合は現在日本におります。現地に行けない状態になっておりますので、お話しする内容が少し前のものになっております。この点は申し訳ございません。御了承いただければと思います。

さて、西安に長い間おりましたので、長安城についてお話しさせていただくわけですけれども、ある程度一般向けというお話をいただきましたので、最初に簡単に長安周辺のことについて御紹介させていただきます。

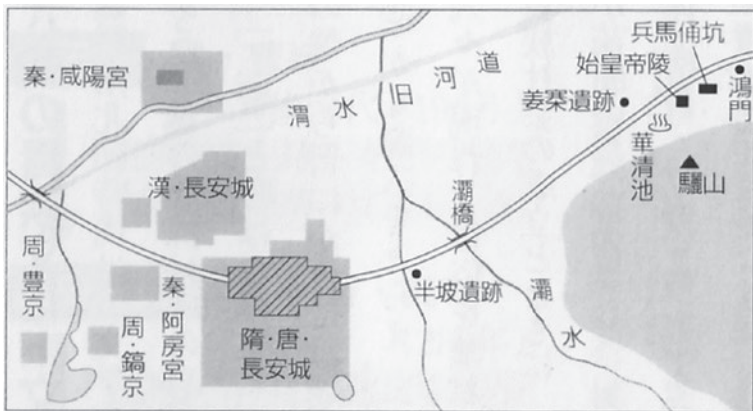
西安は「十三朝の古都」と言われているところですが、西安周辺には五つの古都がありまして、これらを全部含めて十三朝と申しております。一番古いところでは西周の都

だった豊京と鎬京遺跡があります。そして秦の咸陽です。そして漢以降、南北朝時代から隋の初期まで使われた長安城、そして隋唐の長安城があります。さらに現在の西安は明代以降のものですけれどもかなり古いので、これらを含めて西安付近の古都の遺跡とされています。

「十三朝の古都」という言い方をよく西安の方はします。西安の人は何かにつけて歴史の話をしませけれども、これは彼らのアイデンティティであり誇りになっているわけです。最もよく言われるこの十三朝は、先ほど申しました周の時代、秦の咸陽、漢の長安、隋・唐の長安、これらが全部含まれて合計で一〇〇〇年以上首都であった。そういう歴史としてカウントされます。

現在の西安は一年間だけ、李自成の大順国の首都になったことがあります。これは西安の人たちも歴史、首都としてはカウントしていません。これを入れると十四朝になります。これらの各時代で首都をしていましたので、合計一〇〇〇年間以上、十三の王朝の都であったということを書いてあるわけです。本日はこの中の長安と呼ばれた時期のもの、漢長安城と隋唐長安城について御紹介いたします。

もちろん長安の重要性は言うまでもないわけで、いろいろな形でクローズアップされます。例えばこういう歴史上の、首都、都城研究においては、中国古都学会という学会



1 西安地図

宇都木章監修・小田切英執筆『すぐわかる中国の歴史』東京美術、2003年より

が中国にはごさいますけれども、長安は中国古都学会公認の中国八大古都の筆頭に選ばれております。またつい最近、今年一〇月の第三回中国考古学大会ではこの一〇〇年間の「百大考古発現」を選びましたが、その中でも西安の古都関連では次のような遺跡が選ばれました。漢の長安、唐の長安、秦の咸陽、そして周の豊京と鎬京です。これは当然と言えば当然ですけれども、このように中国全土の中でも西安の古都遺跡群には抜きん出た存在感があります。

（通信障害中絶）

このように長安は中国の考古学界の中でも特に重視されている遺跡になるわけです。これを研究する意味が大きいのは、もちろん長い間統一帝国あるいは分裂期を含めて首都であったから当然ですけれども、特に特徴があります。簡単に申しますと、漢長安城はそれまでの戦国時代以来の都城の集大成であるとともに、統一帝国の首都としては初めて建設された首都ですし、後の時代の首都、都城の原型になったものです。

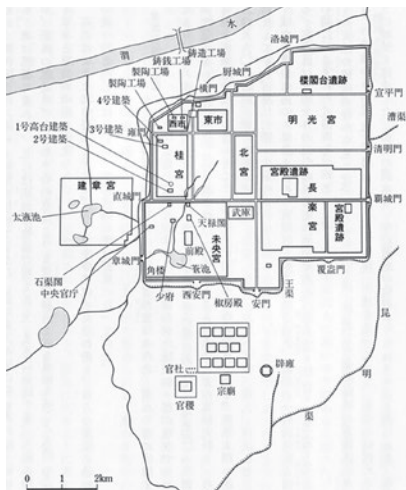
隋唐長安城は南北朝時代を経てこういった都城のスタイルとして完成された形と言うことができます。もちろん日本、平城京や平安京など東アジア各国の都城のモデルになりましたから、研究する意義は非常に大きいわけです。これは言うまでもありません。そして近年の発掘で特に注目されているのが、漢長安城から唐長安城までの都城の変遷

及びそのつながりです。

漢長安城に関して簡単に建設の過程をまとめますと、紀元前二〇二年、漢が建国した直後に咸陽の南の渭水南岸のほうへ宮殿を築き始める、ここからスタートいたします。最初に造られたのが長樂宮という宮殿です。同時に未央宮その他各宮殿の建設を始めます。その後、城壁の建設を開始いたします。紀元前一九四年頃には城壁の建設がほぼ完了するわけですけれども、この後、また城内の整備が順次行われていきます。さらに周辺の宮殿建築、離宮、さまざまな庭園等の建築も大規模に行われどんどん建築が進んでいきます。

初期の建築から次第に整備が進んでいきますが、漢の武帝のときにまた大規模な拡張が行われます。こういった形で建築が進んでいくわけですけれども、まず宮殿を造って、その後、城壁を造ったことが一つの特徴であります。このような形で城郭が形成されました。いわゆる都城は、それこそ日本の平城京、平安京などは比較的きれいな長方形になっているわけですけれども、ああいうものを見慣れると大変奇妙に感じられる形になります。

これは「斗型」と通称されていますけれども、西北のほうに特にいびつな形の長方形と言った方がいいのでしょうか。面積は約三六km<sup>2</sup>あり、城門は東西南北に各三つずつ開かれ、計一二の城門があります。東西南北それぞれ三つずつ



2 漢長安城

李令福、市来弘志訳「漢昆明池の建設及びその長安郊外の環境に対する影響について」(『日本秦漢史学会報』第9号、2008年)より

つの城門を開くあたりは比較的端正といいますが、形式は整っていますが、その城門の間を結ぶ道が真つすぐつながらっていないなど、後世の隋唐長安城に代表されるような整った形のものに比べると相当に異質です。したがって、ここからどうやって発展していったのかということが問題になっていくわけです。

いわゆる「漢長安城」という言い方をしますし、中国の歴史学界・考古学界でも普通に「漢長安城」と言っています。紀元前二〇〇年に造ってから前漢が滅びて王莽の新しい時代の末期

に戦乱でかなり大きく破壊されました。その後、首都が洛陽に移っていくわけですけれども、南北朝時代になりますとまたいろいろな王朝の首都になって使われ続けます。そして隋の初期まで首都として使われ続けますので、断続的にはありますけれども、南北朝時代はかなり長期わたって首都として使われますので、「漢南北朝長安城」と言っています。

漢長安城の周辺は、先ほど見ていただきましたように、現在の西安市内とは少し外れたところにあります。現在の西安は明代に築かれたものですけれども、それ以降、近代になっても漢長安城の地域はずっと農村で、大きな開発はされないうままでした。したがって西安城の城外になって放置されていたわけです。実はこれが幸いしまして開発などはされていませんから、そのまま残っているわけです。それで発掘調査を大変やりやすいという条件がある意味で整ったわけです。

本格的に発掘調査がされるようになったのは中華人民共和国成立後です。一九五六年に中国社会科学院(当時:中国科学院)の考古研究所に漢長安城考古隊が発足しまして、ここから中央政府も本格的に力を入れる発掘が行われるようになってきます。社会科学学院が都城を本格的に発掘しているのは、西安、洛陽、安陽が中心になっています。西安は漢長安城考古隊と唐城考古隊と二つありまして、漢長安

城と隋唐長安城をそれぞれ発掘しています。これは洛陽も同じで、洛陽も考古Ⅰ隊と考古Ⅱ隊があり、後漢から北魏の洛陽城、および隋唐の洛陽城の発掘をしています。

こうやって本格的に発掘を行うようになりますが、この初期の発掘の指揮を執ったのは王仲殊先生で、その後劉慶柱先生なども発掘に携わりました。こういう一流の考古学者の下で発掘が行われました。一九五〇～一九六〇年代にどんどん発掘が進んでいきます。城門、宮殿、城内の道の発掘などが進みます。もちろん一九六〇年代後半から一九七〇年代初期は全然発掘できませんでしたが、七〇年代後半になるとまた発掘を始めていきまして、一九八〇～一九九〇年代と順調に発掘が進んでいきます。このように発掘成果が積み重ねられていきまして、長安城の内部の構造が分かるようになってきました。

これはグーグルアースの写真で、上空から見た写真です。これを見ても緑が現在でも多く、農村地域は残っています。長安城のこういう堀の部分もかなりよく残されています。城壁も高さ一メートルぐらいは残っておりまして、かなり跡を追うことができます。やはりずっと農村地域であったことが幸いしています。

ただ、この写真は若干古いところがありまして、今は急激に開発が進んでしまつてこの緑のところが大分なくなつてきています。



3 漢長安城グーグル

先ほど五〇年代から発掘していると申しましたけれども、二一世紀になってからまた急激に発掘が進んでいきます。この長樂宮や未央宮に関しては、以前も初歩的な発掘調査は行われました。こういう初歩的な調査については試掘といいますが、表面採集及び測量が最初に行われました。その後、本格的な調査があまり行われなかったのですが、二一世紀になってどんどん掘るようになってきています。

城外についても本格的に発掘を行うようになってきました。例えば建章宮一号遺跡、漢の武帝のときに造られた離宮を発掘しておりますし、各城門も発掘しています。また南北朝時代の宮殿の発掘がようやくこの頃から行われるようになってきました。さらに渭橋、橋の発掘も城外の重要な成果になります。未央宮の再発掘等々も行われています。こうしていろいろな発掘が行われたことよって全貌が次第に分かるようになってまいりました。

例えば最新というわけではありませんけれども、近年発掘されたものの中で、私が現場に行った遺跡を最初に御紹介します。漢長安城渭橋遺跡は渭水に架かる橋の遺跡です。二〇一二年に発見され、この後、数年の間、本格的な発掘が続きました。二〇一三年には中国の考古学界が選ぶ「全国十大考古新發現」の一つに選ばれています。さらにこの後、継続的に数年間発掘が行われ、三方所から七つの橋が出てきました。この中には唐長安城の時代のものも含まれ

てはいますが、「渭橋遺跡」とまとめて通称されます。

この中で最も注目されたのは厨城門一号橋ですが、これはかなり大きいです。南北の長さが約八八〇メートル、橋梁の間隔が一五・四メートルですから、非常に大規模な橋が発見されています。これは漢長安城の北壁の城門の一つである厨城門の北一、二〇〇メートルほどのところで発見されました。この厨城門の東にある洛城門の北にもやはり遺跡として橋が発見されています。

厨城門、洛城門の橋の部分です。厨城門、洛城門はそれぞれこの辺にあります。現在の渭水は大体これより大分北にありますから、もちろん渭水は現在と流路、経路は変わっているということも分かりますが、渭水の流路の問題もかなり重要な発見になりました。

この七つの橋のうちよく残ったものについては、北京大學によりC一四年代測定が行われ、年代が求められました。最も大きい厨城門一号橋に関しては、戦国時代の末期から前漢の初期ぐらいの年代と考えられます。ただ、これは修理されながら使われていたので、部分、場所によって年代が違ってきまして、一番北側のほうは後漢から魏晋期の橋だと言われています。修理しながら使い続けていったわけですが、北側のほうが修理されているということです。厨城門三号橋は唐代、東にある洛城門の橋は前漢末期から後漢初期のものと考えられております。

先ほど流路のお話が出ましたが、渭水は今、長安城より随分北側を流れています。いつからこれが北側に移っていったのかということについては、かなり大きな問題になっていきます。そもそも漢長安城が「斗」の形になっている原因の一つと考えられているのがこの渭水の流れで、渭水の流れが現在よりも南にあるからこういう形になったということが考えられています。そのほかにも北斗七星の形をかたどった等々いろいろな説がありますけれども、いずれにしてもかつての渭水は現在よりも大分南に流れていたことは以前から分かっています。この発見で具体的な位置も分かりました。

もう一つは、いつ渭水が北に移っていったのかということです。これは幾つか説がありまして、この発掘が行われる前は徐々にだんだんと北に移っていったという考え方が比較的有力でした。渭水が北に移っていく原因の一つは、造山運動と関係があると言われています。西安の南にある秦嶺山脈は険しくて高く、最高峰の太白山は富士山と同じぐらいの高さがあります。この太白山を含めて現在でも隆起が続いていると考えられています。そうしますと、当然ですけれども南のほうが高くなりますから、川は北に移動していきます。

造山運動によって次第に北に移っていくというと、一定のペースで移っていくと考えられるわけですけれども、こ

の遺跡の発掘で、戦国末期から前漢初期に造られたと考えられている厨城門一号橋の砂礫の層の中から「康熙通宝」が出てきたのです。砂礫層から出てきたということは、つまり川の底だということです。康熙年間ですから一七世紀後半から一八世紀です。この時期まで渭水の河道が基本的にはこの位置にあったことが大体明らかになってきました。

そうすると急激に北のほうに向かった、移動していったということが分かりますので、これに関しては自然地理的な面でかなり興味深い問題になってきます。こういうふうな地理や地形の問題まで大きく考え方を考えるきっかけになった遺跡になります。唐代の橋もありますので、同じような場所にずっと付け替えられてきたということになります。

私は鶴岡和幸先生の研究プロジェクトに加えて頂き、二〇一三年に現場を拝見することができました。大変貴重な機会で、連れて行っていただいて誠にありがとうございます。

一般に公開されている橋の写真はこういう状態です。このようにたぐさんの杭が打たれて橋梁を造り、上に板を渡して橋を造るといふ非常に大規模なものになっています。このように長安城の周辺も含めてさまざまな遺跡が現在、発掘されています。

隋唐長安城や漢長安城に関しては、もちろん極めて重要であることは言うまでもないわけですし、文化財としては国家級文物に非常に早い時期から指定されてはいました。が、世界遺産ではなかったのです。

これは非常に奇妙なことであると長い間言われてきましたが、二〇一四年になってやっと世界遺産登録が行われることになりました。その結果、陝西省にある世界遺産が一気に増えました。それまでは秦始皇帝陵及び兵馬俑坑だけでしたが、二〇一四年に陝西省内の七つの遺跡が一気に世



4 渭橋

界遺産に登録されました。これは「長安―天山回廊の交易路網」―西安から新疆ウイグル自治区までセツトになった、一連のシルクロードの遺跡をまとめて世界遺産に登録したものです。

同時期に中国のさらに西、カザフスタンとキルギスの遺跡も「長安―天山回廊の交易路網」の一部として世界

遺産に登録されました。ここから遺跡の整備保護が始まります。それまでは、先ほどの写真を見ていただいたように、正直、漢長安城に関しては発掘調査は行われませんが、保存・保護という観点で言いますとほとんど放置に近いような状態でありました。

遺跡が発掘されて、遺跡の部分は整備されますが、それ以外のところは農村が従来そのまま、農村地域と遺跡が混在している形になっていきましたが、世界遺産に登録されると突然、整備・保護が始まります。実は整備・保護は観光開発が目的ですから、保存というよりは開発措置が急激に始まります。驚くほどの勢いで変化が進んでいきました。

漢長安城は長安城村という村もありましたし、そのほかに幾つか農村がありました。多くの村が撤去され、ほぼ全域が公園化されました。さらに、この周辺でも幾つかの地域で公園化が進められ、後ほど御紹介いたしますが、西のほうの郊外の昆明池は巨大な公園になるなど、世界遺産登録と同時にこれらの地域が保存と称する開発にさらされることになりました。

どういう状態になったのかも幾つかご紹介いたします。未央宮や長樂宮は比較的早くから発掘が進みましたが、この周辺には農村はあまりありませんでしたが、それ以外のところは昔のままの農村でした。漢代の図書館にあたる天祿閣、石渠閣あたりが大きく変化しましたので、まずこ



をご紹介いたします。それから未央宮周辺、昆明池の辺りを少しご紹介いたします。

天祿閣遺跡は八年前の二〇一三年に参りました。そのときここには天祿閣小学校がありまして、学校の中に遺跡がかるうじて保存されているという状態でした。参観を御願いしましたら、校長先生みずから案内してくださいまして、見せていただきました。土台しか残っていないわけですが、柵で囲って保存措置はされています。この上には後世の祠が建っています、これも含めて保存されていました。



5 天祿閣 2013年筆者撮影

ここはその後訪ねていないですが、漢の未央宮遺跡にはその後も何度も行っていきます。数年前にも行きましたけれども、そこ上から上を眺めますと小学校は全部撤去されています。完全に公園化されているのが見えまして、この天祿閣もこの土台だけが残されている状態になっています。

す。このように整備なるものが急激に進んでいきます。

一番東の門であります霸城門は最も早く発掘が進んだところの一つです。霸城門は早い時期から整備が進みまして、堀の部分を広げて親水公園にしています。二〇一四年頃にはもうこういう状態になっていました。奥のほうに見えるのは劉邦の巨大な銅像です。当時城外はまだ保護区域になっていなかったため、こういうことが平気でできてしまうわけです。

未央宮周辺は、以前はトウモロコシ畑でした。この写真は二〇一五年の段階です。世界遺産に登録されてから一年



6 霸城門外 2014年筆者撮影

足らずでこの状態になりました。未央宮の土台のところは非常によく残っておりまして、これは昔からずっとこのままです。周りは全部トウモロコシ畑だったのが世界遺産登録の一年後に農村は完全に撤去され、公園が造られて、かなり大きく変化しました。

この後、現在までの



7 未央宮 2015年筆者撮影

ところ変化はありませんけれども、このように世界遺産登録によって一気に変化してしまいました。保存を考えればもちろんこのほうがよいわけです。上に砂利を敷いて地下に手を付けない形で保存していますから、これ以上破壊されることはありません。したがってこの保存の仕方は悪くないと思います。

ただ、先ほど申しました昆明池はなかなか、やってみましたが、というような保護措置をしております。昆明池遺跡はこちらです。漢の武帝が建章宮を造つたときに太液池という池を掘りますけれども、さらにもっと西南のほうに昆明

池を掘ります。昆明池は周の時代の二つの都のすぐ近くです。そこを掘ってしまったという。どうも漢代に掘ったときに既に周の遺跡の破壊をしているようですが、そうやって巨大な池を造っています。

漢代の長安城周辺の水環境は、縦横に運河が走っておりますし

て、さらに自然の河川を利用して水路をつなげています。これによって水運の便を図ると同時に水量の調節をして、貯水池としての機能も果たしていたと考えられます。昆明池で有名なことは、南方の雲南のほうを攻めるときに水軍の訓練をした記録がありますので、巨大な人口湖であったわけです。

この昆明池の遺跡は、本格的な発掘は二〇〇五年です。ボーリング調査と試掘と測量が行われてきて、どのようなものがあるのかを大まかにつかむことができました。建章宮遺跡の発掘と同時に進んでいます。昆明池は以前からいわゆる七夕伝説の起源の一つになったところだと言われています。彦星と織姫、つまり牛郎と織女ですけれども、その石像があったところです。これは昔から現在までずっと残っていて、民間信仰の対象になっていました。

このようにあらかた図面を描けるころまでは調査が行われましたが、二〇一一年に陝西省がこの昆明池を文化生態景区にするという決定をしました。二〇一二年に西安市がそれを基にして西安の周りの河川を、生環境も含めて整備するというので、観光開発するプロジェクトを発表しました。昆明池はその中の最も重要なプロジェクトの一つと位置付けられ、大規模な開発が始まりました。

もちろん二〇一四年の世界遺産登録が開発に弾みをつけたわけですが、その後、昆明池の遺跡に人口湖



8 昆明池 2019年筆者撮影

を掘ってしまっただけです。まさに遺跡に掘っています。掘った面積は一〇・四km<sup>2</sup>、杭州の西湖の約二倍、頤和園にある昆明池の約五倍の広さの人口湖を掘ってしまいました。これは考古ではありません。明らかな遺跡破壊と開発です。二〇一八年に本格的に公園として公開されまして、二〇一九年に行つてまいりました。

これは現況とは申しますと、やや嘆かわしい状態になっております。遺跡にこんなことをしていいのかという疑問が頭を非常によぎりました。これは漢の武帝だそうです。そのほかに牽牛織女の銅像なども建てておりますけれど

も、問題の池はこれです。巨大なものを掘っています。そもそも「昆明池七夕公園」という名前になっておりまして、牽牛織女は意識しているのでしょうか。幸いに本来の石像自体は手を付けられていません。石像のあったところは公園の範囲から外れています。いずれにしても「やっつけてしま

た」感がありありと窺えます。

博物館内部のジオラマによりますと、このような巨大な池を掘ってかつての昆明池を復元した、と称しています。そのすぐ隣が西周の都の遺跡ですから、遺跡を破壊していかないか結構危ない。博物館のジオラマには現在より湖が広い完成予想図がありました。いまのところはまだ整備中です。こういう形で遺跡の開発が行われています。

これが将来的にどうなるか、まだ開発をやるのかということはやっと分かりません。二〇一九年の段階では御覧のような状態です。新たに拡張したという情報は見つからなかつたので、今のところこのままではないかと思えます。新型コロナウイルスの影響で中国は人の移動を非常に制限しましたので、これも長い間閉館されていきました。今年の夏に再開しています。ということで、漢長安城に関してはかなり成果のある発掘が幾つも行われているのですが、保護に関しては首をかしげざるを得ないようなところもございます。これも含めて現況をお話いたしました。漢長安城に関してはこういう状況になっています。

隋唐長安城に関しては、発掘を進めにくい事情があります。隋唐長安城は唐末の黄巢の乱で灰燼に帰して、最後は唐を奪った朱全忠によって大明宮を始め多くの宮殿や官署の建物なども解体されて洛陽などに持ち去られてしまいましたので、ほとんど破壊し尽くされたわけですね。その後、

再建されたのが現在の西安城よりもさらに狭い城で、明代に拡張したのが現在の西安城です。

ここから現在の西安の市街地が発展していききましたので、実は隋唐長安城はほとんどが市街地の下にあります。したがって発掘は非常ににくい状態になっています。再開発に伴って少しずつ発掘される、一部分、一部分、虫食いのように掘られていくスタイルになっています。何しろ広いですから、発掘されたのはごく一部です。もともと大明宮に関しては、近隣の住人を全て立ち退かせて大明宮国家遺址公園にしましたので、ここは掘りやすくありません。

隋唐長安城に関して言うと、本格的な発掘が急激には進まないという事情がありますけれども、二〇世紀から徐々に発掘が進んでいきました。大きな発見が幾つもあるわけですが、今世紀になりますと、一番大きな発掘調査は大明宮です。

二〇世紀の段階では大明宮の宮殿エリアは、含元殿と麟徳殿だけは保護されていました。その周囲は、実は以前は西安のスラム街でしたので、言っては悪いですが、非常に汚いといえますか治安が悪いことで有名なエリアでしたが、二〇〇七年から工事を始めまして、二〇一〇年までこの巨大な地区全ての住民を立ち退かせて全て公園にしてしまうという大工事を行いました。このときに南の丹鳳

門の部分を大きく発掘して、そこが現在は博物館になっています。

その後、長安城内の西のほうの道路、南の朱雀大街、東市など、虫食いに再開発に伴って発掘を進めていきました。東市に関しては発掘である程度成果が出てきました。西市に関しては二〇世紀の終わりから本格的な発掘をして、二一世紀になって発掘が完了するとこのあたりも住民を全て立ち退かせて、巨大なテーマパーク兼ショッピングモールにしました。



9 丹鳳門 2019年筆者撮影

これら最近いろいろと発掘報告がされている中で、一番新しいものとしては二〇二〇年まで発掘していたものがあります。長安城の東北のほうに東北角夾城及び十王宅という遺跡が出ています。これなどは市街地を再開発して虫食い状に発掘するかどうかという形になるか、よく分かる例です。唐長安城で言うと一番



### 10 発掘位置（十王宅）

西安市文物保護考古研究院「隋唐長安城東北角夾城及十王宅遺址2020年度發掘簡報」  
 (『文博』2021年第1期)より

東の角のところを再開発に伴って掘っているの、かなり奇妙な形になります。

夾城及び十王宅遺跡と呼ばれていますけれども、夾城といいますが、それは長安城の城壁の中に造った皇帝専用道です。唐の初期の段階、特に三代目の皇帝高宗の時から大明宮が宮殿区になりますが、有名な玄宗は皇太子時代に住んだ興慶宮を非常に気に入って、皇帝に即位した後もここにすることがかなり多かったのです。ただ、大明宮が正式な宮殿でさまざまな儀式なども大明宮で行いますので、興慶宮と大明宮の間を往復しなければいけない。そのために皇帝専用道を城壁の中に造りました。これを夾城といいます。

さらに東北の角は後に「十六王宅」と言われますが、玄宗のときには「十王宅」と言われたエリアです。これは王子たちをまとめて住ませたエリアです。皇帝の子供は成人すると王に封じられてそれぞれ責任ある立場に就くわけですが、幼少の頃はみなまとめてここに住ませて「十王宅」と称したという記録があります。実際「十王」と書かれた遺物が出ています。後に「十六王宅」と改名されましたが、そういう皇族、王子が住む特殊エリアです。それと夾城ですから、そういう皇帝に関する特殊な遺跡が発掘されたのです。

この遺跡はここを再開発するときに出てきたということです。大明宮遺跡は現在、完全に公園化されています。

ども、このすぐ近くを鉄道が通っており、鉄道の南側になります。鉄道の北側は今でも少し残っているごみごみした地域が残っていますけれども、南側は再開発されて今は新たな商業地域になり、大変賑やかになっています。その建設のために再開発したときに出してきました。

二〇二〇年に掘った辺りですが、建物を建てるための四角い敷地を掘るわけですから、当然、遺跡としては変な掘り方にならざるを得ません。ただ遺構は南北方向にきちんとそろっていたので、ある程度見やすい形で発掘がされました。こちらが北ですけれども、このように道路遺跡です。これは夾城の中の道路です。幅約二三mの道路があったと推定されています。中国の場合は土が黄土ですから、同じ道路を使い続けると輻自体が遺構として出てくるわけですが、そういう輻の跡が一〇本五組出てきました。そのほかにも攪乱、柱穴なども出てきました。

ここは二〇二〇年に掘った所ですので私は行くことができませんでした。ネットから引用した写真をお見せして申し訳ございませんけれども、こういう感じで掘っています。十王宅の東北部分で、東北角と言われています。壁らしきものの遺跡が出ているということです。

これは輻です。車軌が決まっていますから、同じところを何度も何度も通るところやって遺構として発掘されるようなものになっていくわけです。玄宗のときに興慶宮から

大明宮の間に建設され、その後、唐末までの遺物が出ていますので、唐・長安が壊滅するまでの間、この夾城はずっと使われ続けたことがはっきりしました。

隋唐長安城は掘りにくいですが、さまざま考古学者の努力によって次第に全貌が明らかになっています。城内の道の遺跡は二〇世紀に出てきていまして、城内でもかなり幅が広い道が掘られています。また、排水のための溝まで付けられているなど、かなり整備された道路遺跡が出てきていまして、今ご紹介した遺跡もそうしたタイプの一つということになります。

このように再開発に伴って遺跡を掘っていくわけですが、これも、唐の長安に関しては、保存措置はどうなっているのか。実は発掘後に建物を建ててしまい、その遺跡は破壊されてしまうという形の発掘が進められていることがほとんどです。市街地のものに関してはあまりきれいに残っていないというのが現状ですが、少し郊外の場合は残されることもあります。

これらの遺跡の中で門の遺跡はある程度残されている部分もあります。例えば南の明德門は朱雀街の一番南の出口ですから非常に重要なところですね。長い間発掘がされていなかったですが、近年になって調査が行われると同時に、保存措置がされるようになってきました。明德門は現在は遺跡公園にされるなど、幾らかは保存されています。

隋唐長安城の城壁は戦闘のための防御用の高い城壁ではありませんので、残りはよくないですけれども、城の東南角の曲江付近などで若干残っています。現在保存されています。

かなり保存措置がよく講じられている例として、円丘遺跡を御紹介いたします。円丘は長安城外にあり、後の天壇に当たるものです。この時代はまだ天壇という言い方はしませんので、遺跡としては唐円丘と呼ばれます。非常に重要な遺跡ですので保存はされていますのですが、一九九九年に発掘がされる以前は放置されていました。

発掘がされた後もずっと放置に近いような状態になっていましたが、幸いなことにこの遺跡自体は私が留学し長く勤務していた陝西師範大学のキャンパス内にあるため、再開発も何もなくずっと保存はされていました。

発掘が行われた一九九九年はちょうど私が留学していたときですので発掘現場を見にいきましたが、発掘直後から雨ざらし野ざらしで、自由に誰もが入れるような状態になっていました。その後、柵を造って鍵をかける基本的には非公開の形で残されていました。公園化が決定されたのが二〇一五年で、二〇一八年に一般公開されました。

それ以前にはまだ鍵をかけて非公開という状態でしたが、頼めば見ることができましたので、私も何回か頼んで見せていただきました。完全に放置されたままで、上に多

少土はかぶせているのですが、雨ざらしです。しかも上に登ることができました。これは私にとってはありがたいことですので登りましたけれども、こういうことを繰り返していくと遺跡の破壊につながります。

#### (通信障害中絶)

さて、これが現状です。このように今は完全に周りを囲まれていますが、入れないようになっています。確かにこのほうが保存にはよいです。隋唐長安城に関しても保存措置が少しずつされるようになってきています。ただ、先ほど申しましたように何分にも市街地にごさいますので、大変やりにくいということがあります。

円丘遺跡は今はいきれいに整備されています。今は周りに高い建物がたくさん建った市街地になっていますので、このような措置をしないと保存は難しいということが言えます。

漢長安城、隋唐長安城それぞれに多くの発掘成果がありますけれども、同時に保存についてはかなり苦心をしているということが言えます。保存に関しては農村地域にある漢長安城のほうが比較的よくされています。少なくともこの数年は大きな遺跡破壊につながるような行動は見られませんが、これに関してはかなり希望が持てると思っています。

こうして二つの長安城の全貌が明らかになってまいりま



11 円丘遺跡 2019年筆者撮影

して、今はかなり細かいところまで地図を描くことができます。同時に近年、特にこの一〇年ぐらいの発掘で大分イメージが変わった部分があります。これは今、都城研究の焦点の一つになっているもので、漢長安城から隋唐長安城などにどのようにつながるか、という問題です。

先ほど申しましたように漢長安城はかなりいびつな形をしておりまして、平面図を見ると隋唐長安城とは似ても似つかないというような形態をしています。また、内部がほとん

んど宮殿であるという、後世の都城から考

えると特殊な形になっています。したがって

これは発掘が始まった一九五〇〜一九六〇年代からかなり激しい論争がありました。

まずは、住民はどこに住んでいるのかという点に関して、城内のそこかしこにいるという説もあれば、いや、住民の大半は城外に住んでいて城内は宮殿区

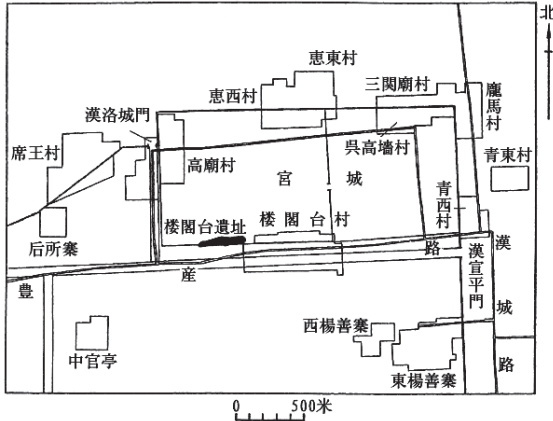
であるという説もあるなど幅広い考え方がありまして、後の都城とかなり性質が違います。

もう一つは、漢が滅びた後、魏晋南北朝時代の長安城に閉じては、あまりにも史料が少な過ぎたため何が何だか分からないということがずっと続いてきたわけです。若干ですけれども文献記録に残っているのは、例えば東宮、大城、小城という名前と呼ばれるものがありますが、それが一体どこなのかということはさっぱり分からない。それは文献記録の限界ですから、考古発掘を待たなければ分からないわけです。

これについては、二〇〇三年に大きな突破がありました。長安城の一番北東の部分でボーリング調査が行われて、魏晋南北朝時代の宮殿区が発見されたことで、ここから漢より後の長安城研究が一気に進むようになりました。当時は長安城の東北の一角を区切って東西に宮殿を造り、東小城、西小城と呼ばれていました。その二つの城をつなぐ門の遺跡まで発掘されました。漢代の未央宮や長樂宮に比べるとかなり小規模です。

ここは橐閣台という村があるので橐閣台遺跡と呼ばれておりまして、本当に長安城の東北の角です。ただ、現在は若干の土手というか基台らしきものが残っているだけです。この宮殿区に当たるところは真つ平で、完全な畑です。二〇一一年に行きました後も何回か訪ねていますけれど





12 樓閣台遺跡

窪添慶文「魏晉南北朝時代の長安」(東洋文庫中国古代地域史研究班編『水経注疏訳注下渭水編』東洋文庫、2011年)より

ども、変化はありません。世界遺産登録後もこのエリアは再開発から取り残されていますので変化なしですが、つまり遺跡保存にはよいわけです。ここは今は本当に捨て置かれた状態で、一部はごみ捨て場です。すごい状態です。この遺跡を発掘したことから分かってきたことは、東北のエリアが完全に宮殿区だったということです。

一部分を区切って南側に城壁を造り、宮殿区にして防衛しやすいようにしていました。その南側に官庁が並ぶエリアができていたようです。特に西魏・北周期はこの辺が官庁エリアであることは明らかに分かっています。それ以外の城内はあまり人口が見当たりません。城内の西部地域にはさまざまな工房が発見されています。人が住んでいるというよりは、いろいろな生産の場になっていくことが分かります。漢代以来の城壁自体の形は残っていますが、戦闘になったらやはり最後は城内東北の宮殿区に立てこもるといった形だったようです。史料に出てくる大城、小城とはこの宮殿区のことです。実際記録を見ると、敵に長安に攻め込まれるとすぐに「大城」「小城」での戦闘になってしまうのです。漢代の長安城という非常に広いエリアを守り切るということが、兵力的にも人口的にもできなくて、この辺りに立てこもるといった形で戦闘が行われたことが多いことが分かってきました。

漢長安城と隋唐長安城は明らかに形状が異なりますので、隋唐長安城がダイレクトに漢長安城を継承したとは言えないわけですが、注意しなければいけないのは、隋が新しい長安城を造る前までここに都を置いていたということです。したがって継承関係が全然ないわけではない。そして、これらの宮殿区や官署区が出てきたということから、幾つかの共通点と言えるものも指摘されるようになって

てきました。

まず、宮城が都の北にあります。それから東宮、東城とも言われますけれども、「東宮」というのは皇太子の別名でよく言われるわけでして、現在の日本でも東宮御所がございます。漢代も確かに皇太子のことを東宮と言っていたんですが、必ずしも東に住んでいたわけではなく、あくまで呼称です。ただ、この宮殿からは明らかに皇太子が住むところは東にあることが分かっています、名実ともに東宮になっています。

この内部の南北地区に沿って宮殿を並べて造っています。宮殿の南側に官庁街を造っています。このあたりは隋唐長安城と共通点があります。もちろん隋唐長安城の起源はどこか、何かというのは非常に大きな問題ですので、さまざまなどころの影響を受けていることは明らかです。

北魏の洛陽城、北魏の平城、北斉の鄴城などさまざまな要素がありますけれども、漢長安城に関しては従来、隋唐長安城とあまり継承関係はないと考えられていましたが、こう見ますと、やはり隋唐長安城の源流の一つとして考えられるという見方がこの発掘の後、だんだんと指摘されるようになってきました。そうしますと、漢長安城自体も隋唐長安城を通じて日本の都城に影響を与えたということも言えるということになります。

私自身は専門が魏晋南北朝史なので、隋唐長安城よりも

漢長安城のことを今日は長くお話いたしましたけれども、こういうふうには本日に継続的に発掘が進んでいきます。コロナ下において発掘は一時、全くストップしていましたが、今年から徐々に再開されてきているようですので、今後とも二つの長安城の発掘が進んでいくことが期待されます。もちろん漢の長安城は公園化されていますので掘りやすいです。西安は既に人口一〇〇〇万人を超えようとしています。急激に発展してきているので再開発が次々に行われて、隋唐長安城は、その結果、発掘が進むという関係になります。今後とも年を追うごとに新発掘がどんどん発表されると思いますので、そういうことについては今後とも期待したいと思います。

二年近く現地に行っていないので、大変古くて荒いお話になってしまつて申し訳ございません。貴重なお時間をお借りして少しお話をさせていただきました。誠にありがとうございました。